高齢動物の歯科処置における注意事項

【はじめに】

近年、人間同様に犬・猫の高齢化が進んでいます。これは、獣医医療の進歩、飼い主様の動物達への健康意識の高まり、企業の努力によって嗜好性が高くなった処方食の開発で食事管理が可能になった事などに起因していると思われます。

今回、当院では高齢動物の歯科処置を行うに際し、術前・術中・術後にどの様な点に注意を払っているかについての注意点・管理について述べたいと思います。

【準備】

歯科処置は、処置内容によっては長時間（２時間以上）に及ぶ場合が有ります。また超音波スケーラーが熱を持つので冷却の為に水の使用が欠かせません。よって、たとえ夏場であったとしても体表面の体温低下を防ぐ対応を講じて下さい。当院では、保温マットを下に敷き体表面には体温が低下しない様にバスタオルなどを掛けて保温を心掛けています。

【麻酔管理】

基本的には、自分が慣れている麻酔の組み合わせで構いません。
当院では、フェンタニル、ドルミカム、プロポフォール（猫の場合はアルファキサンの場合も有）で気管チューブを挿管し、イソフルランで麻酔を維持します。

特に高齢動物の場合は、血圧に注意を払って下さい、Map 60mmHg 以下の低血圧状態の持続により、腎臓が障害される可能性が高くなる。（術後腎不全）

↓

先ず、循環血液量を増加させる。→乳酸化リンゲル液(10mg/kg)　心疾患症例は除く
昇圧剤の投与　エフェドリン(0.05~0.1mg/kg)iv　1cc を生食 39cc で希釈
ドブタミン(3~10μg/kg/min)CRI　心疾患時は 8μg/kg/min

【合併症対策】

重度の歯周病患者、猫の全臼歯抜歯又は上顎犬歯抜歯でフラップを作成した症例には、血栓と感染による術中・術後の合併症（歯性病巣感染）を防ぐ目的で、血液凝固阻止剤（フラグミン 100IU/kg SC）の投与もしくは、蛋白分解酵素阻害剤(以降 FOY 1 mg/kg/hr)を術前、術中、術後に静脈点滴で投与を実施して下さい。これは、犬・猫に関わらず実施しています。

【疼痛管理】

当院では、歯槽骨を切削して分割抜歯を行う場合は、フェンタニル（5~10μg/kg/min）CRI で投与しています。NSAIDs は、急性腎不全の誘発要因になる事があり、使用は控えています。猫の口内炎の場合、舌側側を剥離する事で舌浮腫が起きます、浮腫の軽減と疼痛目的でステロイド(1mg/kg SC・iv)を使用しています。

【処置における注意点】

高齢動物の歯科処置の場合は、概ね抜歯処置がメインになる事が多い。上・下顎第１後臼歯以降は、歯周靭帯が明瞭な事が多いが、上・下顎第１後臼歯より前の臼歯は、アンキローシス(歯周靭帯と歯槽骨が癒着)になっている事が多い、よってその歯を抜歯する場合は、難抜歯になる事が多く、処置に時間を有する事が多い。歯冠破折した場合、根尖周囲病巣が無い犬の場合は歯冠切除で構いません。根尖周囲病巣と猫の場合は、残根してしまうと臨床症状の改善には至りません。猫の歯頚部吸収病巣の場合は、可能な限り残根を除去して下さい、残りは歯冠切除でも構いません。